

れ、近代・前近代の人々と現代に生きる我々の生命観等について考えた。もう一つの企画展「生の中の死」では、近世から近代を中心として、人間の誕生と死を福島県内に残る史料を中心に表現し、人間が生と死に対して持つ意識の変遷を描き出すことが目的とされた。本書では、この企画展に込められたメッセージを端的に示す文章も取り上げられている。

ここでは、本書に収録された医療に関わる論考として「富士山北麓の薬園と山論」及び「会津藩における種痘の普及と民俗」を紹介する。

前者は、享保期の薬草政策について、幕府権力との関わりとして論じられた従来の研究に対し、地域の人びとが薬草政策をどのように捉え、どのような影響をもたらされていたかを検討したものである。富士山北麓を対象とした分析は、幕府の薬草調査・保護と当該地域の人びとの山野利用との関わりから論じられている。そこでは、富士山北麓の利用をめぐる訴訟の過程から、薬園の存在が近隣の村々から尊重されていたことを指摘している。この点に加え、上吉田という村が、幕府が誤記した薬園下賜証文を利用して富士山北麓における権利の拡大をはかる姿から、公儀の権威を逆手に取った百姓の、近隣の村々や幕府に対する周到な戦略の存在が指摘されている。

後者は、従来の幕末期における種痘普及の研究が、医師たちの活動に焦点が当てられていたのに対し、疱瘡や種痘と領主や民衆との関係性に注目した。その際、疱瘡対策をめぐる民俗及び種痘の普及を取り上げ、両者の関わりにも検討を加えている。

疱瘡対策をめぐる民俗については、赤牛・疱瘡

神・祈禱・庭火焚き・薬等、それぞれについて取り上げ、それら複数の方法が平行して実施されていたこと、またそれらが1848・9（嘉永元・2）年頃までは盛んに史料上に現れるが、以後、火を焚くことと神丸という薬のみしか確認できなくなることなどを指摘している。また、神丸といった薬が支配者の管理下に置かれ、領主の「御尊慮」による「御救」として領民に分け与えられていたことから、領主の権威を再確認させようという志向性を見出している。

他方、種痘の普及については、会津藩における種痘の開始時期や接種方法に加え、種痘普及を目的とした刊行書や触書をつかって種痘普及の障害及び旧来からの民俗との関係性について検討している。そのなかでは、1853・4（嘉永6・7）年頃から種痘に関する活動は活発になり、同時に種痘普及をめぐる藩の関与が次第に大きくなっていく様子から、種痘を自らの管理下に置こうとする藩の志向性も指摘している。

2つの企画展と各論考からは、支配・被支配という関係に加え、生と死をめぐる人びとの意識まで描き出そうとする意欲が感じられる。医療を視点とする研究の可能性が詰め込まれた本書をご一読いただき、医療をめぐる研究を深化させる上でおおいに参照されることを期待したい。

（竹原 万雄）

〔編集・発行：酒井耕造著作集刊行会、頒布価格：2500円、A5判、324頁、あいづね情報出版舎へ直接お申し込みください。〕

TEL: 0242-27-3130 FAX: 0242-26-5603,
〒965-0826 会津若松市門田町大字御山字村中
332-1, E-mail: aizune@knpgateway.co.jp〕

梅溪 昇 著

『続 洪庵・適塾の研究』

会誌編集部より梅溪昇著『続 洪庵・適塾の研究』の書評を依頼された。筆者は洪庵・適塾に関して造詣の深い専門家ではないし、洪庵と適塾関

係者の業績の顕彰を目的とする適塾記念会の会員でもない。しかし本書には、埋もれていた古い拙稿が紹介されていることから無関係ではないし、

洪庵研究の第一人者である著者の警咳に接したこともあり、適任者でないことを承知で書評をお受けした。

洪庵は岡山で生まれて元服まで育ち、父の勤務のために上坂して蘭学を学び江戸や長崎でも修行した。伝統文化の栄えた大坂で開いた蘭学塾は、新しい西欧文化への時代の要請もあって、洪庵の名声が高まるとともに日本一の蘭学塾へ発展した。洪庵は多忙な活動の中にも郷里を忘れなかった人で、往復に長時間を要した当時であって再三にわたり帰省している。昨年は岡山の生んだ偉大な先人を顕彰するため、岡山城秋季特別展として「蘭方医・緒方洪庵と周辺の人々」が開かれ、洪庵と門弟などに関する貴重な資料が展示された。

著者は大阪大学名誉教授(国史学)で昭和28年に赴任して以来、洪庵以外にも多くの著書を執筆している。洪庵に関しては、恩師である藤直幹教授の残した膨大な研究抄録の中から資料を抽出して解説し、『緒方洪庵と適塾生一日間瑣事備忘に見える』を発表された。その後も洪庵と門下生に関係する資料を発掘し、適塾記念会の会誌『適塾』に多くの論文を連載している。さらに50年以上にわたって記念会の運営に当たり、同時に「適塾」の発行に直接たずさわって来られた方である。本書は著者の『緒方洪庵と適塾』、『緒方洪庵のてがみ』(緒方富雄と共著)、『よみがえる適塾—適塾記念会50年のあゆみ』(芝哲夫と共著)や、『洪庵・適塾の研究』などに次ぐ大著である。

15年前に出版された「洪庵・適塾の研究」は、主として洪庵に関する未発表資料と「適塾」に掲載された論文から構成されている。このたびの続編は、著者の洪庵と適塾をテーマとした講演の内容や、前編の発行後に「適塾」に寄稿した「緒方洪庵のてがみ」についての関連記事、洪庵の末子・六男取二郎宛の書簡など数多くの書簡の紹介と、洪庵が傾倒したドイツの名医フーフェランドの略伝、洪庵稿「脚気説」などからなっている。全体として洪庵と周辺の人たちの手紙とその解説が、700ページの半分以上を占めているのが特徴であろう。

冒頭の第I部には「大阪近代医学の源流—洪庵

と西洋医学の出会い」(阪大医学部外科開講記念会)、「近代医学と適塾」(福井県医師会)、「適塾と大阪」(日本病院学会)、洪庵を支えた賢夫人「洪庵夫人八重の話」(阪大医学部学友会)などの講演が収録されている。スライドも掲載され、洪庵の医学における貢献とともに「道のため、人のため、国のため」という扶氏医戒の精神を強調しており、講演を聴いた誰もが洪庵と適塾を理解し関心を持てるような極めて充実した内容である。洪庵はその当時における最新の医学を日本へ導入しようと努力しており、医学のみならず、日本の科学全体のレベルアップを目指した先達であった。

「緒方洪庵のてがみ」は洪庵の曾孫である緒方富雄先生の畢生の著作であるが、予定されていた3巻の完成を見ることなく死去されたあと著者が依託されて完成した。さらに著者により15年後に第4、5巻が追加出版され、家族や親族、門下生などに宛てた全5巻、約250通のてがみが写真つきで解説され解説されている。それによって洪庵の考え、行動、さらに洪庵をとりまく環境や当時の社会情勢などもわかり、同時に周囲の人達への思いやりに満ちた洪庵のやさしさが感じられる。

拾遺には1969年(昭和44)の本会誌(第15巻1号)に筆者が寄稿した「山鳴大年にあてた洪庵と郁蔵の書簡」が掲載されている。当時は岡大生理学助教授(のち教授)であった中山沃先生のご指導とお勧めをいただき、片桐一男先生に解説を、さらに緒方富雄先生の校閲を得て発表したものであり、筆者の本会入会の契機になった思い出の論文である。このたび「適塾」から転載され、その他に筆者がお知らせした他家旧蔵の洪庵のてがみも紹介されている。「洪庵のてがみ」に収録されなかったものや、未発表の手紙がまだ眠っているのではなかろうか。判明している洪庵のてがみの正確な数は不詳であるが、当時から洪庵がいかに高名な蘭学者であり、医学者であり、教育者であったか、いかに懇切丁寧で筆まめな指導者であったか、残された手紙によって洪庵の人物像を伺い知ることができる。現在のように交通が便利で携帯、mail、FAXなどが頻用される時代には、このように多くの手紙が後世に残ることはあり得

ない。

本書は洪庵宗の最高の宣教師である著者の渾身の著作であり、多くの方々に一読をお勧めするとともに、予定されている『洪庵全集』の早期完成のために、著者のご健康とさらなるご尽力を念願

するものである。

(小田 皓二)

[思文閣出版, 京都市左京区田中関田町 2-7,
2008 年 2 月, A5 判, 716 頁, 9,500 円+税]